



関東支部ニュース

日本分析化学会関東支部

Vol.18

支部長巻頭言 「産の活力を支部運営に」 関東支部長 東京理科大学工学部	田中龍彦	2
関東支部活動報告 第68回分析化学討論会 「宇都宮討論会顛末記」 宇都宮大学大学院工学研究科	上原伸夫	3
「分析化学討論会後記番外編」 東京理科大学理学部化学科	宮村一夫	4
第3回東京セミナー 「関東支部主催 第三回東京セミナー後記」 昭和大学薬学部	荒川秀俊	5
第48回関東支部機器分析講習会 第3コース「GC/MS,LC/MSの基礎と実際」 - 残留農薬の分析を中心として - 埼玉県農林総合研究センター	中村 幸二	6
第68回分析化学討論会 若手シンポジウム 「次世代の計測・分析 - 若手研究者の挑戦 -」 東京大学生産技術研究所	火原彰秀	8
第30回 東北・関東分析化学若手交流会 産業技術総合研究所計測標準研究部門	加藤尚志	10
編集後記		11

支部長緒言

関東支部長
東京理科大学工学部 田中龍彦



産の活力を支部運営に

支部長の大任をお受けしてから半年、支部恒例の各種行事、地区活動も滞りなく活発に行われております。また今年5月には、支部の総力を挙げて第68回分析化学討論会を企画・運営し、盛会裡に無事終了できたことは誠に喜ばしい限りです。これもひとえに深見元弘実行委員長(宇都宮大学農学部)をはじめ、実行委員や関係者各位の努力の賜物であります。厚く御礼申し上げます。

関東支部の会員現況(9月現在)は、個人会員2,878名(正会員2,591名、学生会員287名)と団体会員694口(維持会員152口、特別会員329口、公益会員213口)で、全会員の47%を占めていますが、会員数の漸減傾向は続いています。しかし、関東支部が主催する「機器分析講習会」、「環境分析基礎講座」などには、今年も全国から数多くの受講申込みがあります。残念なことに、受講生には支部が主催している講習会との認識は全くなく、単に日本分析化学会の開催事業としか理解されていないようです。本部所在の東京地区で開催されるためやむを得ないのかもしれませんが。

支部事業が円滑に運営されるためには、多くの支部役員の献身的な努力が不可欠です。今年度、支部長の立場ですべての活動にわずかですが関与してきましたが、行事の立案から運営に至るまで産業界に属する役員の活躍が目立ちました。分析現場に緊要である課題を提案し、技術者の視点で行事を組み立て、幅広い交友関係を利用して運営するなど、学・官に所属する役員には到底真似することのできない事例に遭遇しました。

これからの支部運営に、産の活力をもっと導入していかなければならないことを痛感しました。学会活動により、本務の仕事が妨げられるのではないかと危惧されておられる産業界の会員は多いと推察されます。参集形態の会合を極力少なくし、ほとんどの審議をメールで済ませるなど委員会運営を見直すことにより、役員を引き受けやすくできるかもしれません。支部役員にもっと産業界の会員を増すことにより、支部会員間の活発な交流、産業界からの会員増強に繋がる可能性があります。

支部活動の活性化、会員間の交流促進、会員拡充等のための方策に関するご意見、ご提案がありましたら、是非お聞かせください。
支部会員皆様のご支援とご協力をお願いする次第です。



討論会顛末記

宇都宮大学大学院工学研究科
上原伸夫

第68回分析化学討論会の報告を支部ニュースに書くようにと依頼されてしまいました。今となっては、良き思い出になってしまったような感がぬぐいきれないのですが、ちゃんとした報告は「ぶんせき」8号に掲載されています。せっかくなので、ここでは書き洩らしたことに焦点を当てて、振り返ってみることにします。ご存知のように、討論会も年会も支部持ち回りになっていますので、7年ごとに関東支部に回ってくることになります。7年という、短いようでいて結構長いようです。7年前にも栃木での開催の打診があったらしいのですが、決めかねているうちに新潟で開催することになったらしいです。(当事者でもなく、また、もはや古いことなので、よくわかりませんが)。さりとて、7年後のことなど誰もわからないし。ということで、北関東で開催していないのは栃木県だけということもあり、今回の開催は宇都宮大学でということになったそうです。



実を言うと、宇都宮大学には“分析化学”の看板を掲げている研究室(講座)は、筆者の所属する工学部応用化学科環境分析化学研究室だけです。ところが、工学部のあるキャンパスは狭くて、討論会を開催できるほど教室の数がありません。ということで農学部がある峰キャンパスで開催するしかないということで、農学部



に所属する深見任幹事に実行委員長の白羽の矢が立ったそうです。そんなかんので、現地の実働部隊員4名(深見常任幹事、荒武常任幹事、清水准教授、それから筆者)をコアに準備を進めて行くことになりました。困ったことは、4名とも討論会規模の学会を主催した経験が無かったことです。このことは、のちのち、事務局の川戸氏を苦しめることになりましたが、知らぬが仏の筆者は「どうにかなるさ」と気楽に構えていました。そして、この気楽さ

が学会会期中に4 kgの激瘡せした原因であったことは、当人知る由もありませんでした。討論会の準備における最初の難関は、討論主題の選択だったと思います。討論主題の選択では、皆さん苦勞されているようです。興味を引きそうなネタは既に使われています。ご多分に漏れずに、討論主題の設定は非常に大変でした。このときに学んだ教訓は、「できないことは、できる人に頼んじゃう！」です。こうなることを見越してか、実行委員には優秀な方々がたくさん集まってくれました。(感謝、感謝です。)そして、実行委員会内に「討論主題の選択」ワーキンググループを作ってもらい、最初の難関を切り抜けました。

68回 分析化学討論会懇親会



討論会の準備における次の、かつ最大の難関は、予算組みだと思えます。いったい何人参加してくれるか、誰も知らない。秋田ではXXX人、北見ではYYY人といったって、

だから宇都宮は、000人とは見積もれないし。事務局からは、「赤字だけは勘弁して！」というプレッシャーもあるし。結局、「えい、やー！」みたいに決めるしかないですよ。まあ、蓋を開けてみれば、沢山の方にいらして頂けたし、赤字にならなかったの、「まあ、いいや。」といったところでしょうか。そろそろ、誌面も少なくなってきたので、最後に「託児所」について、お話させていただきます。これについては、賛否両論ありますが、個人的には良い企画であると思います。というのは、実際にお子さんを預かってもらうところが無くて参加できない方がいらっしゃいます。少しでも役に立てれば良いのではないかと思います。「男女共同社会参画」などと、難しい漢字を並べなくても、助け合いということで、今後も続けてくれればと思っています。最後に、今回の討論会が無事に終わられたのは、関東支部の皆様をはじめとする多くの方からのご支援によるものだと思います。重ねて御礼申し上げます。有難うございました。



分析化学討論会報告番外編

東京理科大学理学部化学科
宮村一夫

関東支部が中心となって、宇都宮大学で本年5月19日と20日の2日間にわたり、分析化学討論会が開催されました。今回、討論会の写真撮影や、討論会記事のまとめを担当する広報担当の委員を割り当てられましたが、時折写真を撮りに出かける以外、さしたる仕事もせず、本部で油売り。機関誌「ぶんせき」の報告記事も気がつけば宇都宮大学の先生方がまとめられました。そんな私を不憫に思ったのか、はたまた少しは仕事せよということか。8月の終わりに突然、支部ニュース原稿執筆の依頼。指令は、柔らかい内容での討論会記事の作成ですので、ここでは「ぶんせき」に載らないであろう討論会+ の様子を紹介することにいたしましょう。

討論会本部

討論会前日にあった準備作業や会議を所用でさぼり、当日朝は、東京から新幹線で重役出勤。所定の集合時間に30分の遅刻。(実は実行委員会に一度も出ていないので、集合時間さえ知らない、不良委員でした。)同じく広報担当の佐藤敬一先生(新潟大)に業務を確認して、まずは会場を一周。受付周辺の写真撮影、そしてポスターと特別講演の会場を入念に視察後、本部に戻り、お茶すすりモードへ。受付やクロークの喧噪をよそに、田中龍彦関東支部長(東京理科大)や、楠文代副支部長(東京薬科大)らとなごやかに懇談。こんな書き方をすると支部役員の先生方も油を売っていたかのようなのですが、さにあらず。学会の会長や理事の先生方が来訪されるたびに、現状報告などの対応をされていました。そのほかでは、会場担当の委員が入れ替えの時間を迎えるたびに訪れる喧噪と、その合間の静寂。その繰り返しは本部です。

本部での懇談は、パワフルな田中美穂先生(東京海洋大)が登場したあたりからヒートアップ。誰からか私が鉄道旅行マニアであることが知れ、ひとしきり鉄道談義。その中で私が鉄道関連の紀行文を連載していることなどが話題になり、今回の執筆依頼につながった模様。なお、実行委員の伊藤智志先生(宇都宮大)が、伊藤貴志先生(東大 東京理科大 カンザス州立大学)と兄弟であること、そして鉄道マニアであることが判明しましたので、ばらしておきましょう。



宇都宮大学三人衆

写真は実行委員長を務められた宇都宮大の深見元弘先生、そして、実務を取り仕切られた上原伸夫先生と荒武幸子先生。3人の先生方は本部で私がお茶をすすっている間、入退室を繰り返して大忙し。この宇都宮大学三人衆を同一の写真に収められたのは、まさに奇跡。先生方、本当にお疲れさまでした。



鳩

一般講演の会場も少しは写真に収めようと思い立ち、興味のある講演があったH会場へ。写真のように、他の学会と同様、パソコンを使った講演が標準です。H会場でも熱のこもった討論が行われていましたが、よく見ると映写機の上に怪しい影。ズームアップしてみると、そこには何と鳩の姿が。衝撃のスクープ映像です。どうやら昼休みに会場へ迷い込んだようですが、講演が始まって出るに出られず、最後の講演が終わるまで映写機の上を往ったり来たり。しばし、観察しましたが、鳴き声一つ立てずに、講演に聴き入っているようでした。

東武鉄道宇都宮線

往復を別ルートにするのは鉄道旅行マニアの鉄則。学生時代は仙台での学会の帰りに北海道、桜上水(東京都西部)の帰りに北陸といった具合でしたが、今は無理。それでも今回は行きが新幹線でしたので、東武鉄道宇都宮線で帰京することにし、学会の撤収作業を手伝った後、東武宇都宮駅へ。JRと東武の宇都宮駅は徒歩で30分ほどの距離。JR宇都宮駅の東口には有名な「餃子像」がありますが、東武宇都宮駅前には宇都宮餃子館のマスコット「スタミナ健太」君。餃子の街、宇都宮ならではの光景です。東武宇都宮線は電化されているものの、日光線と合流する新栃木駅までは単線区間。さらに、日曜日の夕刻であったため、日光から来る全席指定の東武特急スペーシアはすべて満席。そのため、栃木、東武動物公園、北千住と乗り換えを繰り返し、上野到着に新幹線の4倍の時間がかかりました。やはり旅はこうでなくちゃ。

関東支部主催 第三回東京セミナー後記

昭和大学薬学部
荒川秀俊

昨年の年の瀬も迫った12月15日(金)、午後1時より関東支部会主催の第3回東京セミナーが東京品川区にある星薬科大学 新星館にて開催されました。今回のセミナーは1995年に行われた前回の東京セミナーから数えて10年目の開催となりました。参加者は230名と、予想を上回る大盛況でした。その内訳は、食品分析関係が52%、食品以外の分析担当者が15%、その他研究者、情報関係、分析機器・試薬メーカーなどの関係者が33%でした。本会は関東支部主催ではありますが、北海道、長野、愛知、大阪、四国、九州から多数の方々のご参加いただきました。これは、テーマが現在社会的に注目を浴びている「ポジティブリスト制度の施行と残留分析の現状」であったこと、また、講師陣も第一線で活躍されている著名な先生方であったことが影響したように思われます。セミナーは以下のようなスケジュールで行われました(敬称略)：

1. はじめにー食品の残留分析とポジティブリスト制度 (星薬大) 中澤裕之
2. 施行された残留農薬等のポジティブリスト制度 (厚労省) 宮川昭二
3. ポジティブリスト農薬分析の最前線 分析者はどのように対応しているか (化評研) 田嶋晴彦
4. 残留動物用医薬品分析法の現状と課題 (埼玉衛研) 堀江正一
5. 農薬の残留分析法と実際 (残農研) 小田中芳次
6. 残留分析の信頼性確保 (日食分析セ) 中村宗知

最初に、当時支部長で本会を主催された星薬科大学中澤裕之教授より、実行委員長としての挨拶と趣旨説明が行われました。引き続きポジティブリスト制度の講演に入り、続いて5演題が休憩を挟みながら、各40分間ずつ行われました。各演題とも活発な質疑が交わされました。途中の休憩では、参加者の多くが別の会場に設けられたカタログ展示(6社が参加)にも足を運び、飲料メーカーから提供されたドリンクで疲れを癒しながら展示の説明に耳を傾けていました。今回の受講者の感想としては、「知らないことが理解できた」が83%、「やや物足りない」が6%、その他、「内容が難しい」、「現場の話が聞けてよかった」、「制度から現状まで聞けてよかった」などの意見が寄せられました。また、「毎年企画してほしい」との要望もありました。今回の参加者数、全国からの参加、また、参加者の多くが若い方であったことを考えると、東京セミナーの存続は関東支部に限らず、日本分析化学会にとっても重要な意義のあることと感じられました。講演は、午後6時まで行われ、ほとんどの参加者が最後まで熱心に聴講されていました。最後に、セミナーの企画、会場の提供をいただいた中澤教授、また会場のお世話をいただいた星薬科大の先生方、大学院生の皆様に紙面を借りて感謝いたします。



第3コース「GC/MS,LC/MSの基礎と実際」 - 残留農薬の分析を中心として -

埼玉県農林総合研究センター茶業特産研究所
中村幸二

標記講習会は、7月26日(木)、27日(金)の2日間にわたって、(株)島津製作所東京カスタマサポートセンター(神奈川県秦野市)において開催された。2006年5月29日に残留農薬基準にポジティブリスト制度が施行され、残留農薬の検査法に大きな変更が加えられた。ポジティブリスト制度ではGC/MSやLC/MSによる多成分同時分析法が主体となり、各分析機関は新分析法の対応に追われることとなった。このような背景から、本講習会は残留農薬の分析を中心とする極めて限定的な内容にもかかわらず、26名の参加を得て盛況であった。



第1日の講義は、まず始めに星薬科大学薬学部の齊藤貢一氏から質量分析の基礎と新展開と題して、質量分析の理論、質量分析計の構造と種類、クロマト分析への応用など質量分析に欠かせない広範で基礎的な講義があった。次に、埼玉県衛生研究所の堀江正一氏からLC、LC/MS(/MS)の基礎(動物用医薬品の分析を中心に)と題して、ポジティブリスト制度から新しく公定分析法に採用されたLC/MS(/MS)の基礎的な活用法についての講義があった。昼食後、東京都健康安全研究センターの永山敏廣氏から農薬等のポジティブリスト制と試験法の概略と題して、ポジティブリスト制度の概要と施行に伴って大きく変わった残留農薬分析法についての講義があった。午後からは残留農薬研究所の小田中芳次氏から農薬の残留分析法と実際と題して、残留農薬分析を実際に行っていく上での操作上の留意点などについて講義があった。そして、最後に日本食品分析センターの中村宗知氏から分析の信頼性と題して残留農薬分析の精度管理や信頼できる分析値の出し方などに関する講義があった。現在、残留農薬分析の従事者は、GC/MSやLC/MSに最初に触れる人が多く、分析過程でトラブルを抱えることも多いようである。1日目の講義は実践的な内容で、参加者の関心も高く、MS検出器の取り扱い等の機器の管理法やマトリックスの影響の除去法等の前処理法に関する質問がでていた。第2日の実習はGC/MS(講師:化学物質評価研究機構 田嶋晴彦氏)とLC/MS(講師:化学物質評価研究機構 和田丈晴氏)の2班体制とし、11人ずつに分けて2時間半で内容を入れ替えて実施した。数種類の農薬を実際に注入してチャートを取り、データを解析したり、コンピュータ上で、既得データによるシミュレーションを行うなど、参加者が今後、実際に作業を行う上で効果的であったと推察された。本講習会は、GC/MS、LC/MSで今分析している参加者には即戦力となる情報が得られ、分析経験がなかった参加者も、今後、機器が導入された時に迷うことのないような、十分な知識を提供できたものと考えられる。最後に、参加者には関東支部より受講証が授与された。今回の講習会では、(株)島津製作所東京カスタマサポートセンターの多くの職員の方々にご協力いただいた。ここに衷心より感謝するものである。



第68回分析化学討論会 若手シンポジウム 「次世代の計測・分析 - 若手研究者の挑戦 - 」

東京大学生産技術研究所
火原彰秀

去る平成19年5月19-20日に宇都宮大学で開催されました第68回分析化学討論会において、若手シンポジウム「次世代の計測・分析 - 若手研究者の挑戦 - 」を開催いたしました。

分析化学の1つの目標は、新しい手法により「見えなかったものを見るようにする」、「できなかったことをできるようにする」ことにあります。このようなブレークスルーには、分野横断的な議論が有効である場合があります。特に新しい分析手法の研究には、他分野の手法や知識が参考になることが少なくありません。このような観点から、本シンポジウムでは、「分光分析法」「マイクロ・ナノ流体科学」の分野における新規手法開発をテーマとして取り上げ、以下のような先生方に講演をお願いいたしました。

1. 微小作用力を用いる新規な分離・計測法の可能性 (大阪大) 渡會 仁
2. X線回折による不安定種の直接観察 (東京大) 河野正規
3. 中性子散乱法によるナノ細孔中の水の構造とダイナミクス (福岡大) 吉田亨次
4. 蛍光寿命イメージングを用いた細胞内の微視的環境変化の計測 (北海道大) 中林孝和
5. 微細加工を駆使した次世代バイオチップ研究 (北陸先端大) 高村 禅
6. フォトニック流体制御によるバイオチップ開発 (横国大) 丸尾昭二
7. ナノ構造体を用いた分離分析法 (名古屋大) 加地範匡

まず冒頭に基調講演として、大阪大学の渡會仁先生から、「微小作用力」をいかに分析・計測につなげていくか、基本コンセプトから実際の計測例までを講演して頂きました。続いて、東京大学の河野正規先生より、光化学反応を単結晶X線回折により追跡する手法が拓く、新しい分子化学的描像について紹介頂きました。福岡大学の吉田亨次先生からは、通常解析の困難なナノ細孔中の水を中性子線散乱法により解明する試みについて紹介頂きました。北海道大学の中林孝和先生からは、通常の蛍光強度ではなく蛍光寿命で細胞などを画像化する手法により、細胞内環境をより詳細に解析できることを紹介頂きました。北陸先端科学技術大学院大学の高村禅先生からは、マイクロ流体を巧みに制御する技術とDNAトラップや原子発光分析などの応用例を紹介して頂きました。横浜国立大学の丸尾昭二先生からは、光トラップ現象を用いたアクチュエータによりマイクロ流体を制御する斬新な技術について紹介頂きました。名古屋大学加地範匡先生には、マイクロ・ナノ加工を用いた新しい分離分析・生化学分析への挑戦について紹介頂きました。

それぞれユニークな観点から研究を進めておられ、「研究の動機・観点」や「手法の現状」などについて詳しく紹介して頂き、大変わかりやすい講演ばかりでした。参加者



は43名と多くはありませんでしたが、聴講者からの質問だけでなく、講演者同士の質疑も活発に行われました。分野融合的なシンポジウムから研究のヒントを得て帰られた方もいると期待しております。なお、本シンポジウム講演者には解説記事を御寄稿頂き、「ぶんせき11月号」にて特集として掲載されました。本シンポジウムは、関東支部若手の会幹事会の企画のもと、討論会実行委員会、関東支部役員の皆様など多くの方々の協力により実現に至りました。御協力頂きました方々に厚く御礼申し上げます。



第30回 東北・関東分析化学若手交流会

産業技術総合研究所計測標準研究部門
加藤尚志

2007年6月28日(木)・29日(金)の両日に渡り、茨城大学理学部大橋朗氏が幹事となり、筑波山にあるつくばグランドホテル(茨城県つくば市)において、第30回東北・関東分析化学若手交流会が開催されました。近年参加人数を上限100名程度として開催されてきた当会ではありましたが、後述する理由により今回は200名程度の参加を見込んで会場の設定などを行いました。しかし、タイミング悪く前年度幹事校であった東京薬科大学主催による薬学系のシンポジウムと日程が近接してしまったため、当初参加人数が例年を下回るのではないかと懸念も生じたのですが、結果的には一般31名、学生87名の計118名に参加していただくことができました。

今回は研究の街つくばでの開催と言うことで、分野を分析化学に限定せずに様々な分野で実際に手を動かして研究をされている30代から40代の研究者6名の方々に依頼講演を御願いました。講師の方々からは、標準物質開発や企業の製品開発や生産工程の場面における分析化学の役割についてなど比較的我々に身近な話から、タンパク質の構造解析、バイオインフォマティクスを利用したメタボロミクス解析などのちょっと離れた分析のトピックス、また地元つくばの研究所で行われている中性子線を利用した物質界面の非破壊構造解析法の話や地球温暖化解決に向けた太陽電池開発の話など非常に広範囲な分野について、しかも実際に研究に携わっている立場の方々ならではのホットな話題を聞かせていただきました。多少分析化学という部分から離れた話も多かったために質疑が不活発になることも危惧されたのですが、その様な心配も全くの杞憂に終わり非常に積極的な討論が展開されたのも印象的でした。また、現在学位取得のために奮闘している博士後期課程の学生によるアグレッシブな発表2件と一般参加者によるポスター講演41件も行われ、1泊2日という短い日程ながら非常に中身の濃い有意義な時間であったと思われま

夜には懇親会が開催されましたが、開始早々からごく自然に大学や組織の枠を超えた交流の我が次々と広がり、幹事の大橋先生が「各団体の自己紹介をしようと思っていたんですが、かえって興をそぎそうですね。」とつぶやくほどの盛況ぶりでした。

た。しかも、そここで依頼講演の講師の方々を中心に、現在や将来へ向けての研究などについての真摯な討論も展開されており、硬軟両面において有意義な一時が夜遅くまで続けられていたようです。

二日目の午前中に行われたポスターセッションにおいては優秀ポスター賞の投票も行われ、最優秀賞に菊地淳氏(山形大院工)が選ばれたほか、上條利夫氏(東北大院理)、中元浩平氏(筑波大数理物質科学)、小金澤佳菜氏(群馬大院工)、堀込純氏(日立ハイテク)の4件が優秀賞として表彰されました。各賞に表彰された発表はもちろんのこと、それ以外のポスターもいずれ劣らぬ興味深い内容が含まれており、また今回は企業からの参加者によるポスター発表も比較的多く、参加者の皆さんにとって刺激になったのではないかと思います。

依頼講演を御願ひした講師の方々には元々分析化学が専門ではない方がほとんどのため本会初参加の方が多かったのですが、みなさん様に参加者数の多さと熱心さ、ポスター発表などでの議論の活発さに驚きの声を上げられており、本会が30年間積み重ねてきた歴史の重みというものを再認識させられました。このように毎回東北支部と関東支部の共催により活況を続けてきた本会ではありますが、今回のように比較的大人数を収容でき、かつ学生も容易に参加できるような価格で会を開催できる施設が限られていること、参加希望者は例年100名を軽く超える規模が通常になり、場合によっては参加を遠慮していただくケースが増えつつあること。また、それにも関わらず各支部においてまだ参加してもらっていない大学や企業などが数多く存在しており、その掘り起こしが急務であるなどという意見をふまえ、今回は東北支部と関東支部それぞれが単独で若手交流会を開催することになりました。実はこの件についての合意は、昨年度八王子で行われた第29回の際に開催された各出席団体の代表者による世話人会においてすでに取りられておりました。そして「第30回を人数制限をすることなく大々的に行い、一つの節目とする」というのが、今回200名規模での開催をもくろんでいた大きな理由の一つです。

しかし今回行われた世話人会において「支部を超えた交流の場としての東北・関東分析化学若手交流会」の存在意義は非常に大きく、それを全くなくしてしまうのはあまりにもったいないなどの意見が相次ぎ、再来年東北支部主催で行われる予定の第32回若手交流会を例年通り東北支部と関東支部の合同開催で行うということ合意がなされました。その後「一年おきに単独開催・合同開催という形にしては」という提案もされております。



また、これまでの通例では前年度までに取り決めた幹事校が主催者となって準備・運営の全て単年度ごとに取り仕切るという形式でありましたが、来年度行われる第1回関東支部分析化学若手交流会、およびそれ以降におきましては、関東支部若手の会の行事として継続的に若手交流会を開催すること、若手の会幹事会メンバーの中から若手交流会担当幹事を選出して仕切り役とすること、などが先日行われました関東支部若手の会幹事会において決定されました。そして、来年度の若手交流会担当幹事は私がお引き受けすることになり、現在企画立案を行っている最中です。現時点では詳細な日程や場所などについてはまだ決定しておりませんが、できるだけ関東支部としての独自性を出せるような形で開催したいと考えております。また、詳細についても決定次第何らかの形でみなさまにお伝えしたいと思っておりますので、みなさまのご参加・ご協力をよろしく御願ひいたします。

最後に今回の若手交流会をとりまとめ、準備運営に多大なるご尽力をいただきました大橋朗氏をはじめとする茨城大学のみなさまに心から感謝いたします。



編集後記

編集後記である。今回で2回目の編集作業だったが、いつもながら記事を寄せてくださる方々にただ感謝するばかりである。2回目だから何か気の利いたことを書こうと思うのだが、益体もないことを徒然記すのみ。

編集作業をあれこれやっていると、本や雑誌の編集者とはいかに大変なことが身に染みる。この編集以外に中村先生に記事を書いていただいた講習会も担当した。その折、講師の先生が、「マスコミは輸入された中国製品すべてが問題があるように報道している。少なくとも我々が検査してはねられなかった物は安心なのに、はねられたことばかりが強調される。はねられた物は問題があるが、検査を通過した、すなわち流通している物は大丈夫なのだ」とおっしゃったことが印象的だった。なるほどと思いつつも、ついつい中国製品に疑いの目を向けてしまうのはみんな同じではないだろうか。

東京工業大学大学院理工学研究科
原田誠

今回の号から編集に携わらせていただくこととなりました。編集を通じて強く感じたことは、大規模な企画を次々と実現されていく分析化学会関東支部の皆様のパワーそのものでした。さらに関東支部若手の会主催の企画も、若手ならではのパワーとアイデアに溢れ、かつ若手研究者間の重要な交流の場として、今後のさらなる発展に目が離せません。

東京理科大学理学部第一部化学科
由井宏治